



サポーター



田辺 ふみ

アポロ・ドームは熱気に包まれていた。

スタンドの座席は満員。サポーター達は黄色いTシャツを身につけている。三日月やロケットの絵をフェイス・ペインティングした人も多い。

ふだんなら野球が行われるフィールド。そこには満月が輝いている。

観衆はそれを見おろしていた。

フィールドを覆い尽くすようなその巨大な満月は3Dで映し出されたものだった。

クレーターの隆起がはっきりとわかる。

ミハルは深呼吸した。

とうとう、夢が実現する。

ミハルは両手を頭上で大きく振りながら、フィールドに歩み出た。

歓声がミハルを包む。

「みなさん、ミハルです。今日は私と一緒に月面着陸を応援しましょう！」

ミハルはヘッドマウントディスプレイで観衆の様子、それから月面の3D映像を確認しながら、小走りにクレーターの一つに駆け寄った。

「着陸地点、コペルニクスクレーターです」

その上に重なるように着陸船の姿が現れた。

観衆から歓声上がる。

「いよいよ、月面着陸です。なんと、前回の有人月面着陸から百年ぶりの快挙となります」

ミハルは声を張り上げた。

「経費削減策により、中断されていた有人宇宙開発が普通の人々のサポートにより、今、よみがえろうとしています」

そこで間を空けた。

「そうです。みなさんの力でよみがえるのです」

観衆のどよめきがスタジアムを揺らした。

「このアポロスタジアムには二十万人のサポーターの方が集まっています。そして、さらに多くのサポーターの方がご家庭で応援されています。みなさん、この映像が届いていますか？ みなさんの祈りも宇宙船に届いています。さらなる応援をお願いします」

ミハルはサポーターの反応に満足した。

「まず、ロケット打ち上げから、今回の月探査のあゆみをダイジェスト見ていただきましょう」

スタンドの大スクリーンに様々なカットが映し出される。

家族と抱き合う宇宙飛行士。緊迫した表情の管制官。ロケットを開発した科学者達の姿。

大勢の人が祈る姿は打ち上げの際のパブリックビューイングだ。

ミハルは人々の盛り上がりを感じた。

ヘッドマウントディスプレイにもいい数値が表示されている。

「それでは、定刻通り、着陸降下開始のカウントダウンを放送します」

「六十秒前」

すでに進んでいたカウントダウンがドーム内に放送される。

ミハルはドームの天井をちらりと眺めた。円盤状の大きな機械が取り付けられている。これがサポーター達の祈りを力に変えて伝えるのだ。

「……三十秒前……十秒前……三、二、一。発射」

「皆さんの力を！」

ミハルが叫んだとたん、3Dの着陸船が動き始めた。

ロケット噴射の輝きはない。ただ、静かに動いている。燃料を使用していないから、当たり前だ。燃料を使用しないことで、ロケットが軽量化され、製作費も安くなっている。

「わかりますか？ 今、ロケットを動かしているのは皆さんの祈りの力です。ただ、それだけです」

サポーターからひととき大きく歓声の聲が上がる。

「祈りの力。サイコキネシスが発見されたきっかけは皆さん、ご存じですよ。サッカーの試合でペナルティーキックのボールがありえない方向に曲がったことです。

ボールに不正があったのではないか。

シューズに不正があったのではないか。

厳しく調査しても、何も見つかりませんでした。

それも当然です。

ボールのコースを曲げたのはファンの祈りの力だったからです。その後の研究で人数が増えれば増えるほど、気持ちが一つになればなるほど、普通の人でもサイコキネシスを発動することがわかりました。やがて、その力を遠距離に伝達する方法が発明されました。

そして、とうとう、今日、再び人が月に降り立つのです」

ミハルは言葉を切った。

これからが責任重大だ。月への着陸が完了するまで、サポーターの力が衰えないよう、盛り上げ続けなければならない。

ミハルも祈った。自分の力を信じて。